

## 「ヤハリ」考

関 本 至

「ヤハリ」「ヤッパリ」「ヤッパシ」、これらの語が今日の日本語、とくに話し言葉の中で気になるほど頻繁に使われる——さき頃来そういった感じがしきりとじ出した。そこで他人との対話やラジオ、テレビのさまざまな会話の場面などを注意して聞いてみると、たしかにしばしば驚くべき頻度でこれらの言葉が男女、年齢、階層の別をとわず、実によく使われていることがわかって来た。このようなことは、もうすでに誰かがどこかでとり上げている問題なのかもしれないが、以下これに関して多少の愚見を述べてみたい。

つい先日の朝、NHKの或る放送を録音してみた。小学校の男女の先生数人をスタジオに呼び、子供が先生を批判する録音を聞かせながら、アナウンサーが先生たちに質問をするという番組である。次にその一部を記してみる。

録音（女生徒）「ヤッパリ先生デモ人間デスカラ、癪癪オコシテ、アノー、シカッチャウ時モアルケレド、ヤッパリソレダケ私タチノコト思ッテクレテルデス」

男アナウンサー「先生モ人間ダカラトユーンデスネ、カンジャクヲオコスコトモアルダロー、先生ノバアイゴザイマスカ」

男先生A「ヤハリアリマスネ、デモソノ、カンジャクヲオコシテモ、アノ、子供ワデスネ、何カソノシカラレル目的ガワカラナイデシカラレテルテナネ、ソーユーバアイ、一番ソノ頭ニクルテューノガアッタデス、ケドネ、ヤッパリソレモハッキリサエスレバ子供モワカッテクレルンジャナイカナー……」

（中略）

女アナウンサー「今ノ発言ノ中デデスネ、アノ、オコッタアト、サッパリシテホシイテュー生徒サン、アリマシタネ」

男先生B「アア、アリマスネ」

女アナ「ヤハリ、コー、オコッタアト、アトラヒキマスカ」

男先生B「ソーデスネ、アノ、ワタシネ、アノヤッパリ、シカルテコトワムズカシイトオモイマスネ、デ、ホメルコトワネ、コレワネ、ホントニネ、ヤサシイウチニハイルデショークレドモ、デ、シカル、デ、マア子供ナンカワネ、ミンナノ前デシカラレタリシテイチ番イヤデスネ、アノ、ナンカヤッパリ自分ノ欠点ナンカ言ワレタリナンカネ、マーソーユーコト気ヲツケテルンデスケドネ。

デワタシ、アノヤッパリシカルコトアリマスネ。ソノトキワネ、ヤッパリアノ、マ、コノツギワジ  
 ャチャントシテネユー約束ヲネ、アノ、カウスワケデスヨ、ソレデヤッパリアノーシカラレタコト  
 二度トシナイト、アルイワチャントヤツテクレタ場合ニワネ、ソノヒキカエニホメテヤル、デスガ  
 ネ。……」

(中略)

女先生「私ノ場合モヤハリアノソーユーヨーナコトデツイ長ク、コークドクトシカリガチナン  
 デスケレドモ、エ、ソーユーヨーナフダンコーソーユー氣ヅカナイヨーナ教エサトスヨーナ叱り方  
 ラシマンデモ、アノアマリ、コー、ダンダンキカクナリマスネ、ソレデアトモータマッテルトキ  
 ナンカ、モーバント大キイ声デネ、ヤハリー喝シマス、ソレカラシバラクワヤハリアノー先生モ  
 オコルトコワインダナーテユーヨーナネ、キニナルヨーナデス」

ざっとこんな調子である(ついでながら、耳で聞く言葉を字に直してみると、音の抑揚、強弱、  
 緩急が字面に出ないので心もとないという感じが強い。)

なお、「言語生活」10月号に載っている座談会の速記を調べてみたところ、次のような結果が  
 出た。出席者はS(司会者)、K氏(男)、F氏(女)、T氏(男)、Y氏(女)の5人である。  
 行数とは各人の発言が総計何行(1行20字)に収められているかを示し、右端の数字は平均して  
 100行につき「やはり」が何回出たかを示す。

	やはり	やっぱり	計	行数	100行に
T	0	2	2	133	1.5
K	8	13	21	262	8.0
F	8	3	11	109	10.0
T	0	5	5	363	1.3
Y	0	0	0	125	0.0

これで見ると個人差もあると思える。またFは比較的若い女性、Yはかなりの年令の女性である  
 から、年令による差もあるかもしれない。(なお、この速記では後述の「アノ、ヤッパリ」「ヤッ  
 パリ、アノ」などは出て来ないから、ある程度の整理がおこなわれたと見なくてはならない)。

さて、ところみに「広辞苑」を抜いてみると、「やっぱり=やりの促音化」、「やっぱし=や  
 っぱりの訛」とあり、「やはり」は副詞とあって、「もとのまま。前と同様に。なお。やっぱり」  
 と記されている。今一つ「大言海」をのぞくと「やはり=副 矢張 [彌張ノ意ニテモアラムカ]  
 (一) ソノママニテ。故(モト)ノ姿ニテ。(二) ナホ。ヤッパリ。依然。」とあり、出典として  
 史記抄(文明)と狂言記からの例が一文ずつ出ている。このことで森田武教授におたずねしたら、

史記抄からの何箇所もの引例を示して下さって（その中には「ヤハリ」のほかに「ヤッパリ」もある）、原義は「静かに、動かさないで」と言ったような意味だっただろうと教えて下さった。ともかくこの言葉は室町時代より在証される言葉で、江戸時代の滑稽本その他にも屢々見られ（浮世風呂など）、明治以降の文学にも勿論出てくる。日本民衆語の中で根強く生きて来た言葉である。

ところで、手許にある「コンサイス和英辞典」を見ると、

yahari [同じく] too; also; as well; likewise; either 『否定文に』; [結局] after all; on second thought; [依然として] still; all the same; [にもかかわらず] but then; with [for] all (his learning); in spite of (her meakness); [予想どおり] as (was) expected; true to one's expectations

とあって、「ヤハリ」はさまざまな英語表現に対応させてあり、あげてある例文を見てもすべてなるほどとうなずける例である。「同じく」「結局」「依然として」は広辞苑や大言海の説明とほぼ同じである。ところが「にもかかわらず」と「予想どおり」とは論旨展開の方向が互に逆であるような感じである。どうしてこうなるのだろうか。「静かに」「動かずに」という具体的な情態副詞が、「もとのまま、依然として」というように抽象的な陳述副詞になった過程は一考すぐ納得できる。そして「予想どおり」は前からの考えを確認し、その線に沿って叙述を進めて行くのであるから「依然として」と意味的に近似している。ところが「にもかかわらず」となると、そこで論旨が旋回するわけであるから、「依然として」とは方向が逆であると言わなくてはならない。

思うに、「ヤハリ」は、話者が今まで述べて来たこと、あるいは考えて来たこと、あるいは話者の頭の中にある或る種の条理、そういった一種のすじ道、基準があって、そのすじ道に照らし合わせて次の叙述を進めて行くところの、話者自身にとっては確認の、相手に対しては説得の副詞だと言えるのではなからうか。だからある時は話のすじ道に添って「依然として」となり、ある時は話のすじ道をそれと異なるある種の（かなり主観的な）条理に照らして「にもかかわらず」となってくる。ところがその条理は屢々主観的であり、心情的ですらあるために、聞く方ではなぜ「やはり」だかわからないという結果も起ってくるのである。そしてそれは往々論理性を弱くして、それまでの発言（あるいは話手の思考）を軽く軌道に乗せて行くための、中味のどく稀薄な一種の形式辞にさえなっている場合があると見てよくはないだろうか。

こうして、「ヤハリ」は、「アノー」とか「エー」とか言ったようないわゆる間投声（または遊びことば）に、つまり言葉のリズム（音声上および思想上の）を調える形式的表現要素に近づきつつある、すなわち知性的な語というよりは情感的な要素になりつつある、といった感じさえするの

である。上述の例でも「ヤハリ」「ヤッパリ」が13ある中、アノヤッパリが2例、ヤッパリアノおよびヤハリアノが3例、ヤハリコーが1例あることも、「ヤハリ」が「アノー」に近いこと、あるいは「アノー」を補うような役目をしていることを示しているらしくも受けとれるのである。

言葉のはじめまたは途中で「エー」とか「アー」とかが頻用されることは周知のとおりである（「エー言葉」とでも言ったらよいか）。この「エー」は全くと言ってよいほど単なる発話の準備運動のようなもので、類似の現象はどの言語の話し言葉にも見られる。これに似たものに「つき穂のアイウエオ」がある——私の乗るバスの車掌の中に「この車は、ア、バスセンター、ア、21時発の、オ、岩国行き、イ、最終便でございます」などとやる人がいる（演舌口調に間々見られ、「アイウエオ言葉」と言った人がいたと思う。）「アノー」はおそらく指示詞「あの」から来ている（朝鮮語でも日本語の「アノー」に当る「チョー」（指示詞「あの」の意味）があるし、中国語では「シー、シー」（是是、すなわち「この、この」）が「アノー」に当ると聞いたことがある。日本語では「ソノー」「コノー」「コー」もあり、上述の録音の中にも見られる（一括して「アノー言葉」と言ったらよいか）。大学の教授会での発言を聞いていても「エー先生」「アイウエオ先生」「アノー先生」がそれぞれ何人かいることがわかる（私などは「アノエー氏」かもしれない。）

「モー済んだ」の「モー」とか、広島、山口あたりの方言での「ハーええわ」の「ハー」などは、「モハヤ」つまり「すでに」の意であろうが、「モー」や「ハー」は「すでに」を意味するほか、屢々ただ言葉の調子を調える間投声としても使われている。そのような運命を「ヤッパリ」も辿りつつあるのではないか。しかしそうなり切る時には「ヤッパリ」はもっと短略された形をとることであろう。すでにその一步として「ヤッパ」などという言い方もくだけた言葉や方言（たとえば遠州方言など）では聞かれるようである。

「ヤハリ」はこうして、もともとは具体的な情態を示した副詞から、抽象的な陳述副詞となり、それがきわめて主観的情感的なニュアンスを加え、今日では単に自分の発言のすじ道をととのえ、時としてはただ音調をととのえる一種の間投声にさえなっている場合があると見ることができよう。ギリシア語には *ara* とか *rha* とか言った particle があり、辞書を見ると *indeed* などの訳もあるが、実際にはうまく訳せない場合があるとされる。意味合いは勿論互に異なるにせよ、「ヤハリ」と *ara* とは、共に半ば知的、そしてより以上心情的な意味があるという点で何か似たところもあるような気がする。調べて行けば多くの言語（とりわけその話し言葉）にこうしたものは少なからず見出されることであろう。

「ヤハリ」の語源は、*hara*（腹）の音に由来する、と主張する人もある。これは、*hara*（腹）の音が、*hara*（腹）の音に由来する、と主張する人もある。これは、*hara*（腹）の音が、*hara*（腹）の音に由来する、と主張する人もある。